

【お詫び】

「宗教と文化」34号につきまして、下記の訂正がございます。先生方、読者の皆様にご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。

・表紙の遠藤徹先生の研究論文の題名に次の誤りがございました。

(誤) ニーグレンのアガペー思想から「尊びの愛としてのアガペー論へ

(正) ニーグレンのアガペー思想から「《尊びの愛》としてのアガペー」論へ

・表紙裏に掲載している目次の遠藤徹先生の研究論文題名(英文表記)に次の誤りがございました。

(誤) From Nygren's Agape Thought to the Theory of " Agape as Love in Reverence

(正) From Nygren's Agape Thought to the Theory of "Agape as Love in Reverence"

・目次の磯部悠紀子先生のオムニバス講座報告の題名に次の誤りがございました。

(誤) 第4回 信仰と、進歩―ベルクソン哲学における「揺れ」の発展的機能について―

(正) 第4回 信仰と、進歩

・オムニバス講座報告「信仰と、〇〇」にて、久保田桂子先生・磯部悠紀子先生の講義の要約に掲載の誤りがご

ございました。以下に訂正いたします。

第2回 信仰と、母娘―青年期を迎えた娘と母親の関係

久保田 桂子（発達心理学…本学心理学科非常勤講師）

宗教や哲学の中でも親子関係は語られているが、本講座では心理学の視点からその関係をまとめていった。一
定期間を母親の子宮内で過ごし、誕生後は母乳で育つという共通の特徴を持ちつつも、ヒトの親子関係には他の
哺乳類動物とは異なる特徴が存在する。それは、未熟な状態で子どもを産み育てること、歴史や文化・社会の状
況に応じて多種多様な親子関係が存在すること、子どもの誕生後も父親が養育に関わるということ、そしてどち
らかが亡くなるまで形を変えて生涯続くということである。特に最後に述べた特徴は、ヒトの親子関係は他の動
物と比較して絆が強いということを表しているといえるだろう。

斎藤（二〇〇八）は「すべての母娘関係が問題を抱えているというわけではないが、ひとたびこじれると、き
わめて錯綜した愛憎関係の温床となることは間違いない」と言っているが、親子関係の中でも母娘関係は特殊さ
を秘めている。また高木・柏木（二〇〇〇）は自分の理解者、将来の介護の担い手としての期待を母親が娘に抱
いていることを明らかにしており、母親と娘の絆の強さは母親の娘への期待からきているとも捉えられる。そし
て一部の母娘関係においては、その絆の強さによって娘が母親に縛られ、閉ざされた関係から抜け出すことがで

きずに苦しむ状況が生じている。母親が娘の苦しさに気づくことは少ないため、こじれた母娘関係を変えるには娘が母親に伝えていくしかない。子どもと大人の中間に位置する青年期は、子が親から分離し、将来自分はどうしていきたくかを決めていく時期である。さらに、大学生の娘と母親は中学生の娘と母親と比較してより互いを尊重し対等な関係であることが示されていることから（久保田、二〇〇九）、母娘関係が変化する青年期は娘自身が自立する意思を母親に伝え、気づかせることでこじれた母娘関係をよりよい関係を築くことができるチャンス

第4回 信仰と、進歩

磯部 悠紀子（現代フランス哲学・本学哲学科非常勤講師）

フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（一八五九年～一九四一年）によれば、信仰は進歩と深く関わる。ベルクソンの最後の著作『道徳と宗教の二源泉』（一九三二年、以下『二源泉』）に基づいてそのことを明らかにする。

ベルクソンは『二源泉』で、社会には「閉じたもの」と「開いたもの」という二つの性質があると説く。通常の社会は、規模の大小によらず閉じたもの、つまり閉じた社会の性質を持つ。とはいえ開いた社会が別途存在するのではない。社会が真の意味で進歩を遂げるなら、閉じた社会は一時的にでも開いた社会になる。では真の進歩とはいかなることか。

ベルクソンによれば進歩の鍵を握るのは道徳観の転換である。閉じた社会は強制的な道徳によって保たれる。

これに対して開いた社会は強制のない道德によって作られる。すなわち道德観の転換とは、社会の成員に道德的な行為を促す力の向きを反転させることに相当する。それほどの変化がなければ、近代社会の体質は一向に改善されえないとベルクソンは訴える。物質的な進歩に依存する社会は精神的な成長を疎かにする傾向があり、諸々の国際問題はそこに起因するという。真の進歩とは、精神面で社会を成長させることにほかならない。

「そのためにベルクソンが強調するのは、模範となる者を、強制されることなく自発的に見習う姿勢である。これは自らの中で神の声を聞き、自らの意志で呼びかけに応じて使命を果たすというキリスト教の神秘的な側面に基礎づけられている。閉じた社会はこうして強制のない道德的な模倣によって開かれ、真に進むべき道を知る。信仰と進歩が出会うのはここである。」

ベルクソンは最後に人類の覚悟を問う。模範となる者が現れないとしても、未来に向けて自発的に努力する意志があるのか。この言葉は現代を生きる我々にも向けられていよう。真の意味での進歩に常に思いを致し、人類のあるべき姿を次世代に伝えることが我々の使命である。

・「活動報告 二〇一七年度」に記載しております公開講演会の開始時間に次の誤りがございました。

(誤) ▽とき 二〇一七年七月十七日(月) 十三時二十分～十六時十分

(正) ▽とき 二〇一七年七月十七日(月) 十五時二十分～十六時十分